

出土人骨“渡来系”か

【国史跡・青谷上寺地遺跡（鳥取市）で出土した弥生時代の大量の人骨Ⅱ2世紀ごろⅡのDNA分析の中間報告で、人骨の大半は朝鮮半島や中国大陸などからの「渡来系」である可能性が高いことが分かった。分析が進み、日本人の成り立ちの解明につながる成果が期待される。弥生時代の人骨の本格的なDNA分析は全国で初めて。

【園部仁史】

国立科学博物館 DNA分析 中間報告

遺跡は弥生時代前期の縄文系は32体のうち、わずかに1体だったとい、出土した人骨のほとんどは新たに大陸から渡ってきた人骨は少なくとも12の

DNA分析を進めてきた国立科学博物館などは17日、鳥取市内で報告会を開催。同館の篠田謙一副館長は約40の人骨から母系の遺伝情報が分かる「ミトコンドリアDNA」を分析し、32体の塩基配列の特徴を調べることができた」と説明した。



青谷上寺地遺跡のDNA分析研究の中間報告する篠田謙一副館長 一いずれも鳥取市青谷町青谷で



実際にDNA分析された青谷上寺地遺跡出土の人骨

交易拠点説裏付けに

DNAのグループに分けられることから、同遺跡が多様な人の集う交易拠点だったとする従来の説を強く裏付ける結果になった。篠田氏は「父系の遺伝情報もわかる『核ゲノム』の分析を進めることで、日本人のルーツを探りたい」と話した。

出土した人骨には殺傷痕のあるものも含まれ、戦乱などがあったとされる。弥生時代の日本について記された中国の史料「魏志倭人伝」などには「倭国大乱」の記述もあり、人骨を保管する県埋蔵文化財センターの浜田竜彦係長は「どのよう

な人が殺害されたかなどを知ることが、当時の日本の状況を探る手がかりになるかもしれない」と期待する。

次回の報告会は、来年3月に予定。ミトコンドリアDNAを分析した32体のうち5体は、遺跡中心部近くの展示館で17日から一般公開している。問い合わせは同館（0857・85・0841）。